



青年期における自己変容に対する志向性の個人差と 発達的变化

著者	千島 雄太
内容記述	この博士論文は内容の要約のみの公開（または一部非公開）になっています
発行年	2016
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2015
報告番号	12102甲第7805号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00144314

論文要旨

青年期における自己変容に対する志向性の個人差と発達的变化

千島雄太

青年期においては、否定的な自己が意識されやすく、同時にその否定性を主体的に克服しようとする志向性が強いことが指摘されてきた。本論文では、以上のような“今の自分を変えたい”、“変わりたい”という言葉で表現される、主体的に現在の自己の変容を志す気持ちを、“自己変容に対する志向性 (intention for self-change)”と呼び、実証的に検討を行った。

自己変容に対する志向性を検討する際には、個人差に着目することが必要であると考えられたため、次の三つの観点から検討を行った。第一に“青年はなぜ変わりたいと思うのか”、第二に“自己変容を志向する際に、理想とする自分があるのか”、第三に“自分が変わることをどのように思っているのか”である。これらの検討を行うに当たって、アイデンティティ形成、自尊感情、進路意識、自己変容の実現などの変数との関連を併せて示した。また、この三つの観点に基づきながら、青年期における発達的变化についても検討を行った。青年期前期を中学生、青年期中期を高校生、青年期後期を大学生とし、学校段階による比較を行うこととした。以上の検討を通して、どのような志向性を持つことが青年の人格形成や心理的適応などを促進するかについて明らかにされるとともに、青年期において自己変容に対する志向性がどのように発達的に変化するのが示されると考えられた。

理論的検討にあたる第1章、第2章、第3章を経て、第4章から実証的検討を行った。第4章の【研究1】では、本論文において青年期を対象とすることの前提となる研究として、青年期から老年期までを含めて、生涯発達の観点から年齢的傾向を明らかにした。クロス・マーケティング株式会社が保有するモニターを対象に、クローズ型ウェブ調査を実施した。年代と性別を要因とした分散分析の結果、自己変容に対する志向性や関心は、年齢と負の二次曲線の関係にあり、予測通り青年期をピークとして年代が上がるにつれて低くなることが示された。一方で、自尊感情は年代が上がるにつれて高くなることが示された。年代ごとの多母集団同時分析から、どの年代においても変数間の関連は同一であることが明らかにされた。これらの結果を総合すると、青年期以降の加齢による自己変容への関心の低下や自尊感情の増加に伴って、自己変容に対する志向性は低下することが示唆された。この検討によって、自己変容に対する志向性に関して、青年期に注目することの重

要性が確認され、以降は先述の三つの問いに基づいた検討を行った。

第 5 章では、“青年はなぜ変わりたいと思うのか”という問いに基づいて研究を行った。【研究 2】では、大学生に自己変容を志向する理由を尋ね、11 カテゴリを抽出した。【研究 3・4】では、【研究 2】の 11 カテゴリに基づいて項目が作成され、自己変容に対する志向性は因子分析によって 9 側面に分類された。【研究 3・4】を通じて、今の自分を変えたいという気持ちは、全体的に自分自身に対して肯定的な評価をしておらず、自分のあり方を模索しているモラトリアム地位の者において高いことが明らかにされた。すなわち、今の自分を変えたいという気持ちは、青年期におけるアイデンティティの模索過程で生じることが示唆された。【研究 5】では、自己変容に対する志向性の 8 側面が取り上げられ、学校段階を通じた因子構造の等質性が確認された。さらに、自己変容に対する志向性の諸側面は、“将来焦点的-過去焦点的”と“空想的-現実的”の 2 軸で整理され、学校段階が上がるにつれて、将来焦点的かつ現実的な方向へと変化することが示された。

第 6 章では、“自己変容を志向する際に、理想とする自分があるのか”という問いに基づいた検討を行った。すなわち、今の自分（現実自己）をどのような自分（理想自己）に変えたいかを尋ねることによって、理想自己が伴った変容を望んでいるかどうかに着目した。また、【研究 3】において、自己変容に対する志向性はアイデンティティを達成していない者において顕著であることが示されたため、【研究 6・7・8】では、どのような場合にアイデンティティ形成や進路課題への自信が促進されるのかについても検討が行われた。【研究 6・7・8】を通じて、アイデンティティ形成や進路課題への自信に影響を及ぼすのは、理想自己に変わった姿をイメージすることや理想自己への変容のための計画を持つことであることが明らかにされた。また、【研究 7】では質問紙実験が行われ、理想自己を伴って変容を想起することで、何も想起しない場合よりも反芻的探求が抑制されることが示唆された。【研究 8】では、学校段階ごとの比較が行われ、中学生では自己変容に対する志向性を持たない者や、変えたい現実自己が思いつかない者の割合が多く、大学生においては変えたい現実自己は明確であるものを目指す理想自己が思いつかない者や、理想自己が明確である者の割合が多いことが明らかにされた。

第 7 章では、“自分が変わることをどのように思っているのか”という問いに基づいて研究を行った。【研究 9】では、大学生を対象に自由記述式の調査が行われ、自己変容の捉え方について 5 カテゴリが得られた。【研究 10】では、その結果に基づいて項目が作成され、因子分析の結果五つの因子が抽出された。心理的適応や自己変容の実現との関連を検討し

た結果、自己変容が困難であると思っており、変わることに不安や葛藤を抱えているほど、自尊感情が低く、変容が実現されていないことが明らかにされた。特に、“葛藤”の項目として作成された項目は、因子分析によって“不安・葛藤”と“両価的評価”に弁別され、異なる関連を示したため、【研究 11・12】では、葛藤に関して詳細に検討することとした。

第 8 章では、【研究 10】の結果を踏まえて、自己変容の捉え方のうち“葛藤”のみに着目して検討を行った。【研究 11】では、葛藤を扱った先行研究に基づいて、自己変容と現状維持に関して、メリットやデメリットを尋ねるバランスシート作成し、自由記述を収集した。自己変容を肯定する者が多い一方で、自己変容のデメリットや現状維持のメリットに関する記述も多く得られたことから、自分が変わることに對して、葛藤が存在している可能性が示唆された。【研究 12】では、【研究 11】の結果に基づいて、自己変容のメリット・デメリット予期の項目が作成され、クラスタ分析によって 5 群が抽出された。中学生は、自己変容のメリットやデメリットについてあまり予期していない“予期低群”と、現在の自分を維持することのメリットを予期する“現状維持メリット予期群”の出現率が多かった。高校生は、今のままの自分であることのデメリットを予期しつつも、変わることの損失も予期している“回避-回避葛藤群”の出現率が多かった。大学生は、変わることと今のままでいることの両方にメリットを予期している“接近-接近葛藤群”の割合が特に多かった。葛藤群の間の差異に着目すると、回避-回避葛藤群は、接近-接近葛藤群よりも自己変容の実現、自尊感情、内省の得点が低かった。

第 9 章では、これまでの研究を総括し、得られた知見について個人差と発達的变化の観点から整理した。得られた結果を、青年の人格形成や心理的適応の観点からまとめると、自己変容を望む際には、現在の自己のみに注目して否定するのではなく、理想とする自分をイメージして計画的に取り組むとともに、自分の中にある葛藤を理解することが重要である。特に、変わっていくことでもたらされる利益だけでなく、今のままの自分にも良い面があることに気付き、受容できるようになることで、心理的適応を保つことが可能となると考えられる。

続いて、学校段階の比較によって有意差が示された知見を取り上げて整理した。青年期前期（中学生）は、“変わってみたい”という言葉で表現されるような、自己変容への関心が薄く、空想的な自己変容を望む段階にあることが考えられる。そして、青年期中期（高校生）は、“今のままではいけない”という言葉で表現されるような、自己変容を望む一方で、変わることへの葛藤が見られる段階にあることが考えられる。さらに、青年期後期（大

学生)は,“理想の自分に近づきたい”という言葉で表現されるような,理想の自分に向かって,現実的な自己変容を望む段階にあることが考えられる。以上をまとめると,青年期において,変容を空想する段階から,今の自分の否定性に直面し,そこからの脱却を望む中で,次第に理想の自分に向けて現実的な変容を目指す段階へと発達的に変化することが示唆された。

これらの整理を踏まえた上で,教育的・臨床的支援への提言が行われた。具体的には,現実自己だけでなく理想自己への注意を促すこと,自己変容を進めるための現実的な筋道を吟味すること,自分の中にある不安や葛藤を理解することが重要であることが示された。その実践の一例として,学校現場における教育実践活動で使用できるワークシートを作成した。このワークシートの対象は,中学生・高校生・大学生であり,今の自分を変えたいという気持ちを持っている者をサポートするために,本論文の結果に基づいて,三つのSTEPに沿って質問が設定されている。

最後に,本論文の限界と今後の展望が論じられた。限界として,本論文で対象となった年代やサンプル層が限定的であること,横断調査による学校段階間の比較を行っていること,独自に作成した項目の信頼性や妥当性の検討が十分でないこと,回答者の言語表出能力や文章読解力の影響が統制されていないことが挙げられた。そして,今後の展望として,実際に自己が変容する過程を捉えること,他者や環境などの外的要因によって生じる自己変容を扱うこと,過去から現在の自己変容を含めて検討することが述べられた。

(3993 字)